東征の同行者

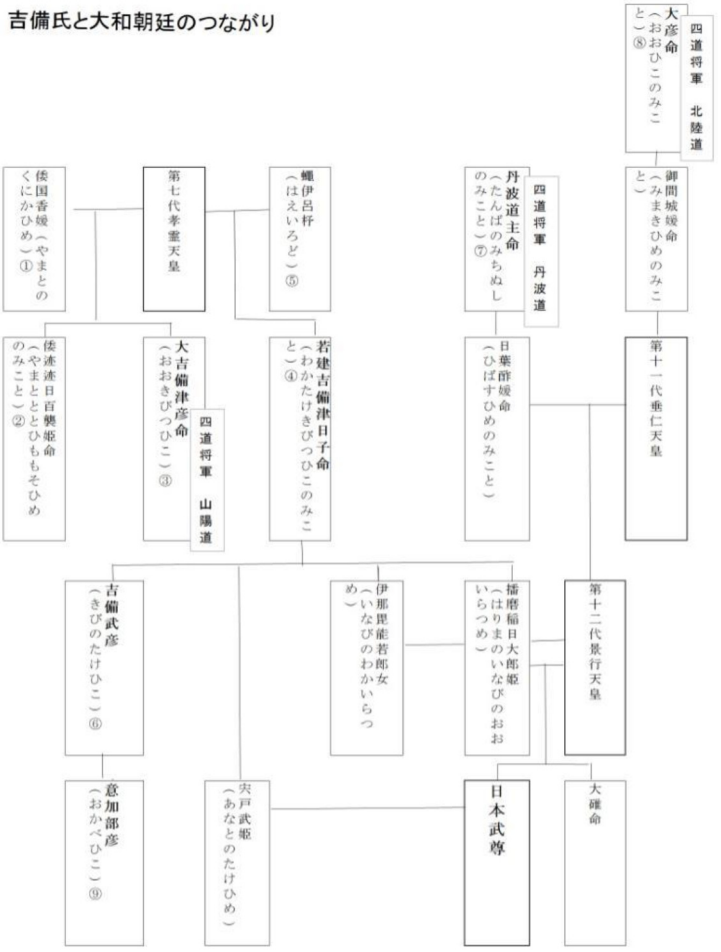
日本武尊の東征は、美少年だったときに行った西征とは異なり、蝦夷との戦いが激しいものとなると想定されていました。そのため、信頼できる腕の強い勇者たちを副将軍として同行させ、いくつかの部隊に分けて進軍したと考えられます。大和から常に一緒だった者もいれば、伊勢や尾張から従った者たちも多くいました。神社の由緒などから分かる従者たちは尾張で集合したと考えています。尾張から、主に陸路を進んだ日本武尊本隊、三河湾や駿河湾を行く海路隊、建稲種命を副将とする山行隊と分かれたと思われます。

大和から進軍

天皇の命によって都から従軍した副将軍らです。次の三者は『日本書紀』に見られる名です。

吉備武彦（きびのたけひこ）

孝霊天皇（わかたけひこ）の子孫であり、父の稚武彦命はかつて叔父でもある四道将軍（おおきびつひこのみこと）の一人彦五十狭芹彦命（ひこいさせりひこのみこと）（大吉備津彦命）とともに山陽道を平らげました。この流れを受け継ぎ、



東征の副将軍として活躍しました。吉備臣らの祖とされています。

『古事記』では、景行天皇は吉備臣の祖先で名が御友耳建日子という者を従わせています。この人は吉備臣の祖先としていることもあり吉備武彦と同一人物であろうと思われます。吉備武彦は吉備氏の祖と言われる若建吉備津彦の子で日本武尊にとっては伯父にあたります。

<吉備武彦が祀られている神社>
熱田神社　静岡県湖西市吉美

日本武尊軍の滞在地となったところです。地名の吉美は吉備がもとになっています。

大伴武日連

大伴武日は倭姫命が伊勢五十鈴川の地を天照大神を祀る地と定めるまで倭姫命を警護する目的で仕えていました。それが終わると都に戻っていたと思われます。大伴武日は天皇に命じられ、吉備武彦らとともに日本武尊の東征に従軍しました。東征後、甲斐の酒折宮で日本武尊から靭部（弓を入れるものか）を賜りました。

<大伴武日連が祀られている神社>
弓削神社　山梨県市川三郷町市川大門

七掬脛

膳夫（料理番）として従軍した、現在のコック長のような人です。カシワの葉を食器にしていたことから膳夫と言われていたようです。

<七掬脛が祀られている神社>
久佐奈岐神社（旧東久佐奈岐神社）　静岡県静岡市清水区山切

久米八腹

七掬脛の子の久米八腹も同行しています。久米八腹は副将軍の建稲種命について行動しており、東征の帰りに駿河の海で建稲種命が命を落としたことを尾張の内津峠に帰ってきた日本武尊に知らせた人です。

建貝児王

大和から父日本武尊に同行していた建貝児王をこの地に留め、地域の開拓を進めるよう命じたようです。

宮道天神社（奥の院）　愛知県豊川市赤坂町宮路

祭神は建貝児王、大山咋命、草壁皇子です。

建貝児王は宮道別の祖で、子の宮道宿禰速麿が穂国の県主となりました。別説として、宮道別は景行天皇の子の宮道別王とする説があります。　また、六七二年の壬申の乱の時に天武天皇と持統天皇の子の草壁皇子が宮路山に仮宮を建てて滞在していました。その跡地に社が建てられたと伝えられています。

多くの兵

九万八千霊社（佐奈岐神社）静岡県静岡市清水区山切

大和から同行してきた三人の従者や他の地域からも合流したと考えられるその他の従軍兵士たちがここに祀られています。

伊勢で合流

五十功彦命

五十功彦命は景行天皇の皇子で日本武尊の異母弟です。東征後、日本武尊が大和に戻る際、五十功彦命は伊勢国北部（三重県四日市）に留まり、国造としてこの地を開墾しました。

神社の近くに伊吹山の戦いを終えて大和に向かった日本武尊が休息した足洗池があります。一説ではこの池に寄ったのは弟に会いに行くためだったともいわれています。

<五十功彦命が祀られている神社>
江田神社　三重県四日市市西坂部町

祭神は五十功彦命です。

飛鳥時代、大海人皇子は密かに吉野を抜け出し伊賀、鈴鹿を経由して四日市に入りました。その時の滞在地となったのがこの地にあった館でした。

尾張で合流

土師氏（はじ）

成石神社　愛知県半田市宮本町

祭神は天穂日命、少彦名命、大己命貴命、誉田別尊、素盞雄命、日本武尊です。知多半島にあり、東征軍の出航地とだったかもしれません。

『熱田舊記』には日本武尊の東征で功績のあったので土師臣をここに封じたとしています。（半田市ホームページ参考にしました。『熱田舊記』の記載不明）

尾治多那久摩連命（おわりたなくまむらじのみこと）

松岡神社　名古屋市熱田区森後町

熱田神宮と関係のある松岡神社の祭神は尾治多那久摩連命（おわりたなくまむらじのみこと）とされていますが詳細不明です。地名の森後は熱田の杜の北にあることから付けられました。

『熱田舊記(熱田旧記)』では松岡姓の祖とされる「松岡真人」という人物名が書かれており、東征の功績により祀られたとされています。

『愛知縣神社名鑑』には日本武尊の東征に従い上総(？)の筑波で亡くなったとされる尾治多那久摩連命の功績が書かれています。筑波で戦死した尾治多那久摩連命は

その地に埋葬され、目印として松の木が植樹されました。東国平定後に尾張に戻った日本武尊は尾治多那久摩連命を祀る社をここに建てたと伝えられています。

尾張氏の系図を見ても建稲種命と同じ世代かその前後にこれらの名は見られません。多分尾張氏一族ではなく、久米八腹（くめのやはら）のように尾張氏についていた人物なのかもしれません。

神主「押根」

足見田神社（あしみだ）　三重県四日市市水沢町

祭神は志那都比古命（しなつひこのみこと）、志那都比賣命（しなつひめのみこと）、瀬織津比咩命（せおりつひめのみこと）、宇加之御魂神（うかのみたまのかみ）他です。また日本武尊も祀られています。垂仁天皇の時代に創建された古社です。元宮は鎌ヶ岳の頂上にあったとも言われています。日本武尊の東征の折、神主の押根が共をしたことが伝えられています。

伊吹の神と戦った日本武尊は病となり、ここに立ち寄った時に「吾が足は三重のまがりの如くして、大変疲れた」と言ったとされています。この故事により三重県の名称の発祥の地となっています。

建稲種命

尾張国造の子、日本武尊の妃となった宮簀媛の兄です。日本武尊の東征に尾張から従っていますが、本隊とは別行動をしています。『日本書紀』では日本武尊は海路で駿河に向かったように読み取れますが、実際は三河を陸路で進み、浜名湖岸から駿河まで船を利用したと考えています。それに対して建稲種命は尾張から陸路で山間部を経由して武蔵に至り、上総で本隊と合流しました。

<建稲種命が祀られている神社>

幡頭・幡豆神社　愛知県西尾市吉良町宮崎前留谷

建稲種命の活躍は『尾張国熱田太神宮縁起』に書かれています。東国を平定し酒折宮で日本武尊と分かれたあと駿河に向かい、そこから船で尾張へ戻ろうとしましたが、駿河の海で遭難して亡くなりました。尾張には建稲種命を祀る神社が数社ありますが、西尾市の幡豆神社も東征軍の旗頭として活躍した建稲種命を祀っています。

建蘇美命（たけそみのみこと）

建稲種命の子で東征に従軍しました。東征後は愛知県額田地区の開拓に尽くしました。そのためこの地域

は「蘇美郷」と呼ばれていました。

蘇美天神・御墳墓　額田郡幸田町大字須美字元屋敷

祭神は建稲種命の子建蘇美命です。神社に隣接して建蘇美命の墓と伝えられている古墳があります。

穂積忍山宿禰

弟橘媛の父で入海神社前から水軍を出したと思われます。（入海神社社伝）

入海神社　愛知県知多郡東浦町緒川屋敷壱区

日本武尊は東征に出発する際、紅葉川から船出したと伝えられ、また、忍山宿禰の娘で走水で海神の怒りを鎮めるために海に身を投じた弟橘姫の櫛が紅葉川に流れついたと言われています。*紅葉川がどこなのか分かりません。

<忍山宿禰がまつられている神社>

川勾神社　神奈川県中郡二宮町山西

日本武尊が東征の折立ち寄り奉幣祈願したところです。

祭神は大名貴命、大物忌命、級長津彦命、級長津姫命、衣通姫命です。垂仁天皇の時代に創建された古社で、相模国の二宮とされています。そのため地名も「二宮町」で、昔から「二宮大明神」、「二宮明神社」とも呼ばれていました。ここは磯長国に属し、磯長国造に関係がある神社のようです。また「川勾」の名は、古代は押切川が曲流していたことからついたと言われています。

忍山宿禰は東征後、相模の国造に任じられています。相模国は相武と磯長の二国に分かれていました。『二宮川勾神社縁起書』には磯長国造の大鷲臣命、相模国造の穂積忍山宿禰とありその名を見ることができます。

日長氏

日本武尊は尾張に滞在中、知多半島に出かけ、日長氏に直接依頼したのではないでしょうか。

日長神社　愛知県知多市日長字森下

日本武尊はこの地を訪れ、村人に日の沈む方向を尋ねられました。村人が「日はまだ高いですよ。」とお答えすると、この地を「日高」と名付けられたそうです。後に「日永」と呼ぶようになり、さらに、「日長」と書くようになりました。境内にある池は日照りが続いても水が枯れないと伝わっています。日本武尊がここを訪問したのは日長氏に東征への従軍を依頼する目的もあったかもしれません。

丸氏

熱田神社　愛知県知多郡阿久比町宮津森下

熱田神社の社伝には「日本武尊の御東征に随伴したる丸氏の奉祀したるものなり」とあり、この地を治めていた丸氏が出陣していたことがわかります。丸氏は大和で勢力を持っていた古代豪族の和爾氏(和珥氏)と同じ一族です。Wikipediaには和珥氏に関して「漁労・航海術に優れた海人族であったとする説がある」と紹介されており、この視点から、丸氏は日本武尊船団のリーダー的存在であったのかもしれません。

猿投山の兵

愛知県豊田市の猿投神社にはとても面白い言い伝えがあります。猿投山は美濃に封じられた日本武尊の兄大碓命が命を落としたところで、山中に墓があります。この辺りに美濃から移り住んだ大碓命の館があったともいわれています。

景行天皇は猿が好きでした。ある日、天皇が伊勢(現在の伊勢神宮の地ではないと思われます。倭姫の巡幸地の当時の伊勢国のどこか)に行幸するとき、この猿を連れていきましたが、猿が不幸なことを行ったので海に投げ捨ててしまいました。日本武尊が東征に出かける時、この猿が壮士(勇者)として同行したと言うのです。東征後、この猿は猿投山にこもったそうです。猿投山の名はこの故事がもとになってつけられています。大碓命に仕えていた者を大碓命が命じて弟に従軍させたのかもしれません。